

マハゼ (ハゼ科)

学名 : *Acanthogobius flavimanus*

別名 : ハゼ

大きさ : 全長 13~25 cm

特徴 : 体色は淡褐色。体の前方はほぼ円筒形。口が大きい。同属のアシシロハゼに比べて頭部が大きく、第一背びれの後端に 1 個の黒色斑がある。また、鱗がやや細かい。底生でゴカイ類やアミ類をエサとする。冬、オスが砂泥底に穴を掘り、メスがその内壁に産卵する。

国内の分布 : ほぼ日本全土

県内の分布 : 利根川水系, 那珂川水系 (涸沼含む), 久慈川などの汽水域などに分布。霞ヶ浦でも遡上してきた個体がしばしばみられる。

県内での生態 : 涸沼における本種の産卵期は 1~3 月とみられている。産卵場は明らかになっていない。例年, 5 月頃に体長 20 mm 前後の稚魚が涸沼に見られ, 9 月には 10 cm 前後となる。水温の高い夏場は成長が停滞する傾向がある。資源の年変動は激しい。

備考 : 天ぷらとしておいしく, 涸沼をはじめ, 那珂川や久慈川などの河口域では, 秋



になるとハゼ釣りが親しまれている。釣りやすいため, 家族連れも多く見られる。

涸沼では刺網などを用いて漁獲され, 甘露煮にも加工される。冬にはウナギせん(竹筒を沈めウナギをとる漁法)でもとれ, 1 本の竹に 5~6 尾まとまって入ることもある。

1970 年代, 涸沼・那珂川では 100 トンもの漁獲があり, 30 cm を越える尺ハゼもとれた。漁業者が足を入れれば踏みつけるほど生息していたというマハゼだが, 現在, 資源状況は悪化し, 漁獲量は 5 トン以下となっている。

主な文献 :

中村 誠 (2002) マハゼの成長と成熟について. 茨城内水試調査研究報告, 37: 29-34.